

---

 書 評 ・ 紹 介
 

---

Paul Demeny and Geoffrey McNicoll(eds.)  
*Encyclopedia of Population*(Vol.1 and 2)  
 Macmillan Reference USA, 2003

昨年、日本人口学会の『人口大事典』が刊行されたばかりであるが、今年、米国の人口学者が中心となって新たな人口辞典が刊行された。本辞典の序文にも触れられているように、英文の人口辞典(あるいは人口研究の到達点を示す総括的レビュー)としては過去にP.Hauser & O.D.Duncan, *The Study of Population: An Inventory and Appraisal*, 1959, J.A.Ross, *International Encyclopedia of Population*, 1982, W.Petersen & R.Petersen, *Dictionary of Demography*, 1985がある。これに本辞典の刊行年次を付け加えてみると、ほぼ20年周期でこのような人口研究の総括的試みが行われていることになる。

本辞典の形式は、80年代の2書のうちRoss版に近い。Petersens版は基本的に2人の著者によるもので、最も“辞書的”で、1トピックあたりの説明は短く(平均約400words)、トピック間の関連づけは弱い。それに対してRoss版は123人の執筆者による129の論文からなり、1トピックあたりの説明はかなり長く(平均約6500words)、“事典的”である。本辞典は278人の執筆者による336の論文からなり、1トピックあたりの説明はRoss版に比べると短い(平均約2600words)。両辞典ともトピック間の関連づけははっきりしているが、Ross版は専門論文的、本辞典は解説的であると言える(しかも極力数式を排して、平易な文章を心がけている)。しかし解説的といっても、今日の人口研究にとって不可欠のトピックをその分野の最高権威者が執筆しており、それぞれのテーマの専門家にとっても益するところが少なくないであろう。Ross版との大きな違いは、本辞典の内容が、Ross版で多くの部分を占めていた世界、主要地域、主要国(特に米国)の人口動向についての統計的解説をほとんど含まず、人口学の主要個別分野、人口史、重要な概念と理論、分析方法の説明にほぼ限られていることである。この編集方針には一長一短があるが、人口動向が変化し易いという点を考えると、より永続的の価値をもつ人口研究の理論的・方法論的側面をより重視した選択と言えるであろう。

内容的には、Ross版以降の20年間における新しい人口動向と人口問題、政策の変化、方法と理論の発達をどの程度踏まえているかによって本辞典の利用価値が決まってくるが、この点で本辞典の利用者が裏切られることはない。

第1に、新しい人口動向・人口問題としては、先進諸国における少子化、エイズなど新感染症、環境問題などがとり上げられている。少子化に関しては「第2人口転換論」(van de Kaa)、「人口置換水準以下の出生率」(H.P.Kohler 他)、「ホメオスタシス」(C.Wilson)、「人口減少」(D.Coleman)など、新しい感染症については「エイズ」(B.Zaba)(6頁の長文)、「新しい感染症」(S.S.Morse)、「死亡率の反転」(V.M.Shkolnikov)などが含まれる。環境関連では「気候変動と人口」(R.J.McIntosh と B.C.O'Neill)、「環境と健康」(A.J.McMichael)、「持続可能な開発」(M.Wackernagel 他)など10のトピックが論じられている。

第2に新しい政策、倫理問題としては、カイロ会議以降の変化を反映して「リプロダクティブ・ヘルス」(I.Herzner)、「リプロダクティブ・ライツ」(R.J.Cook)、「人口問題へのフェミニストの視点」(P.England)が含まれ、先進国問題としての「家族政策」(P.McDonald)、「安楽死」(R.G.Frey)なども議論されている。

第3に新しい人口統計データ、人口分析法としては「人口保健調査(DHS)」(F.Arnold)、「確率論的人口理論」(K.W.Wachter)、「イベント・ヒストリー分析」(M.Guillot)、「多相人口学」(F.Willekens)、「地理情報システム(GIS)」(G.Hugo)などが紹介されている。

なお、人口学のトピックの他に、歴史上著名な60人の人口学者(16世紀のボテロ(G.Botero)に始まり1932生まれのジュリアン・サイモン(J.Simon)まで)の業績が紹介されている。その60人の1人として歴史人口学者速水融麗澤大学教授が選ばれていることを特に付記しておきたい(筆者は斎藤修一橋大学教授)。(阿藤 誠)